

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：34442

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04721

研究課題名（和文）開発途上国の学業不正に関する研究：大学生のライフストーリーから

研究課題名（英文）Academic dishonesty in developing countries: Life-stories of university students

研究代表者

前田 美子（MAEDA, Mitsuko）

大阪女学院大学・国際・英語学部・教授

研究者番号：70454668

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、開発途上国の初等中等教育現場で起きている学業不正行為の実態と背景を、大学生を情報提供者として調べた。主な研究成果は、カンニング行為がどのような機会に・どのような頻度で行われるか明らかにしたこと、カンニング行為を行うかどうかを決定する主な要因が、学業成績などの個人的要因やその個人を取り巻く家族や学校などの文脈要因にとどまらず、その国特有の政治的、社会的、文化的な背景の影響を受けていることを示した点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学業不正に関する先行研究は、欧米の文脈を扱ったものが圧倒的多数で、開発途上国の文脈に関する研究は非常に少ない。さらに、先行研究では学業不正の行為者の声に耳を傾けて情報を収集することをほとんどしてこなかった。本研究の学術的意義は、こうした先行研究が見逃してきた課題に取り組み、学業不正という社会事象の理解に貢献した点にある。また、社会的意義として、学校教育の質や開発援助の効果・効率を低下させてきた学業不正問題の解決の手がかりを示したことが挙げられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the reality and background of academic dishonesty in primary and secondary education settings in developing countries, using university students as informants.

The main findings of the study were to show what occasions and with what frequency exam-cheating takes place, and to show that the main factors that determine whether or not students cheat are beyond individual factors such as academic performance and include contextual factors such as the family and school environment, as well as the influence of the country's specific political, social, and cultural background.

研究分野：国際比較教育

キーワード：学業不正 ライフストーリー 開発途上国 カンボジア カンニング

1. 研究開始当初の背景

開発途上国では、学業不正（カンニング、盗用、なりすましなど）が日常的に行われていた。それは、開発援助の効果・効率を低下させ、児童生徒の学力・学習意欲・出席状況を悪化させていた。しかし、蔓延する学業不正に対して、援助機関は積極的に関与していなかった。実態を解明し問題解決にむけての政策・戦略を立案することが緊急の課題と思われた。

一方、国内外の研究動向に目を向けると、開発途上国の教育現場で起こっている学業不正の実態について、学術的な観点から十分に解明されておらず、その解明は意義のあることと考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、開発途上国の初中等教育現場における学業不正(特にカンニング行為)について、大学生からの情報提供により、その実態と背景を明らかにし、防止策について考察することである。

3. 研究の方法

本研究では、ライフストーリー調査（個人の経験的語りから、生活世界とそれを取り巻く社会・文化を全体的に読み解こうとする調査法）を用いた。カンボジアとインドネシアの大学生を情報提供者とし、これまでの学校生活で経験・見聞きした学業不正についての情報を得た。カンボジアについては、19名の大学生にインタビューを行った。インドネシアについては、個人の経験を詳しく記述する設問を含めたWEB アンケート（有効回答数 110）を行った。

情報提供者本人のカンニング行為の経験を、Fendler and Godbey (2016)の研究に倣って、No cheating（カンニングしていない）、Occasional cheating（特定の教科でのカンニング、あるいは事前準備無しのカンニング）、Frequent cheating（ほぼすべての科目でのカンニング、あるいは計画的なカンニング）に分類し、カンニング行為の機会と頻度について分析した。

また、カンニングを行うか否かを決定する要因については、Bertram Gallant(2008)の枠組みを用い、個人要因（性別・年齢・学業成績など）から個人を取り巻く文脈要因（学校・家庭など）やより広い社会的要因（文化、政治、経済など）まで着目しながら考察した。

4. 研究成果

本研究の主な研究成果を2つ挙げると、カンニング行為の機会と頻度、及びカンニング行為の要因について明らかにしたことである。以下、カンボジアのケースをもとに、この2点の概要を述べる。（なお、インドネシアのケースについては、現在分析中である。また、研究目的に述べたカンニングの防止策についても考察中である。）

(1) カンニング行為が行われる機会と頻度（Figure 1 参照）

- カンニングに関する先行研究では、多くの国で初等教育(Primary)及び前期中等教育(Lower Secondary)の試験よりも後期中等教育(Upper Secondary)の試験においてカンニングが最も頻繁に行われるとされているが、カンボジアでは前期中等教育の試験で頻度が高かった。前期中等教育最終年(G9)の国家試験(National Exam)では一人を除いて全員がカンニング行為をしていた。
- カンボジアの学業不正に関する先行研究では、あたかもほとんどの子どもが初等教育から後期中等教育に至るまで日常的にカンニングを行っているように報告されているが、子どもの経験は多様で個人差があった。初等教育の低学年でカンニング行為を始めた情報提供者(Student 1とStudent 10)もいたが、情報提供者の大半が高学年でカンニング行為をはじめていた。また、初等教育から現在に至るまでほとんどカンニング行為をしていない情報提供者(Student 8とStudent 11)や、いったんカンニング行為をやめて再開した情報提供者もいた(Student 3)。

(2) カンニング行為を行う要因

情報提供者の声から、カンニング行為を行うかどうかを決定する主な要因として、個人要因以外に、「カリキュラム」「教員との関係」「保護者のカンニング行為に対する態度」「同級生のカンニング行為に対する態度」「学校や教育省の規則」があることが示された。これら5つの要因は、学業不正に関する先行研究においても指摘されているが、その作用の仕方や大きさは、カンボジア特有の政治的、社会的、文化的な背景の影響を受けていることが明らかになった。

以下、具体例をいくつか挙げる。

- カリキュラムに示された教育内容が多く複雑で難解すぎるため、試験で高得点を取るためにカンニング行為が行われていた。現在のカリキュラムは、フランス植民地時代のエリート教育の名残であり他国の開発援助の影響を受けている。
- 教員のえこひいきや体罰、教員の熱意・関心の欠如、教員の副業に起因する不健全な師弟関係がカンニング行為の要因となっていた。これらの要因の背景には、伝統的な教員と児童・生徒の力関係、教員の低賃金、教員の欠勤の多さなどがある。
- 保護者がカンニング行為を推奨するか抑止するかは、子どもがカンニング行為に及ぶか否かに影響を

与えていた。保護者の態度は倫理観・道徳観に基づくだけでなく、家庭の経済状況にも左右される。例えば、地方の農家では家計が苦しくカンニング行為に必要な賄賂を準備できないため、保護者はカンニング行為を推奨していない。

- 「みんながカンニングをやっているから」「カンニングに協力してほしい」という同級生の態度や圧力に影響され、カンニング行為に及んでいるケースが非常に多かった。他の国と比較して、カンボジアでは、文化的に同調性や相互援助の精神が高いことが影響していると考えられる。
- 学校や教育省の規則が厳しくなると、カンニング行為が減っていた。カンボジアでは、総選挙前に票稼ぎ目的で、試験における不正行為を厳しく取り締まるという政策が実施されている。

これら5つの要因のうち「教員との関係」はカンボジアでは特に影響力の大きい要因であることもわかった。一方、「教員との関係」は、欧米の文脈に焦点を当てた学業不正に関する先行研究においては主要な要因として扱われていない。このことから、開発途上国の文脈では、欧米とは異なる要因があることも示唆された。

Figure 1. Students' cheating experiences.

Student	Sex	Primary					Lower Secondary			National Exam	Upper Secondary			National Exam Year (Result)	University	
		1	2	3	4	5	6	7	8		9	10	11			12
1	M														2011 (E)	
2	F							X	X	X			X	X	X	2013 (D)
3	F															2015 (D)
4	F															2015 (E)
5	M															2015 (B)
6	F															2011 (D)
7	M							X	X	X			X	X	X	2011 (D)
8	M												X	X	X	2015 (A)
9	F												X	X	X	2015 (B)
10	M												X	X	X	2015 (C)
11	M							X	X	X			(X)	(X)	(X)	2013 (D)
12	M												X	X	X	2013 (C)
13	F							X	X	X			X	X	X	2015 (D)
14	F							X	X	X			X	X	X	2015 (E)
15	F															2015 (F), 2017 (F)
16	F															2011 (D)
17	F															2016 (F), 2017 (D)
18	F															2016 (D)
19	F															2017 (E)

<参考文献>

Bertram Gallant, T. (2008). *Academic integrity in the 21st century: A teaching and learning imperative*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.

Fendler, R. J., & Godbey, J. M. (2016). Cheaters Should Never Win: Eliminating the Benefits of Cheating. *Journal of academic ethics*, 14 (1), 71-85.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Mitsuko Maeda	4. 巻 51(3)
2. 論文標題 Exam cheating among Cambodian students: when, how, and why it happens	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Compare: A Journal of Comparative and International Education	6. 最初と最後の頁 337-355
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/03057925.2019.1613344	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前田美子	4. 巻 -
2. 論文標題 カンボジアにおけるカンニング行為 開発援助の影響に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第22回国際開発学会春季大会 大会論文集	6. 最初と最後の頁 34-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田美子	4. 巻 10号
2. 論文標題 カンボジア教師の不正行為に関するライフストーリー: 教師教育援助への示唆	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学教師教育研究所紀要 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 5 - 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mitsuko Maeda	4. 巻 No.3
2. 論文標題 Actors Holding the Government Accountable in Cambodia: How can it be Done?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 NORRAG Special Issue	6. 最初と最後の頁 72-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mitsuko Maeda	4. 巻 No.3
2. 論文標題 Actores que responsabilizan al gobierno de Camboya: & como puede hacerse?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Monitoreo global del desarrollo educativo nacional NORRAG NUMERO ESPECIAL	6. 最初と最後の頁 74-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前田美子	4. 巻 12号
2. 論文標題 開発途上国におけるカンニング行為- 教員はどのようにかかわっているのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学教師教育研究所紀要 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 98 - 101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田美子	4. 巻 16号
2. 論文標題 教員の副業に関する学術的知見の整理: 国際教育協力への示唆	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 鳴門教育大学国際教育協力研究	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Mitsuko Maeda
2. 発表標題 Exam cheating in school: The experience of Cambodian students
3. 学会等名 The Comparative and International Education 65th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 前田美子
2. 発表標題 カンボジアにおけるカンニング行為 開発援助の影響に着目して
3. 学会等名 第22回国際開発学会春季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 前田美子
2. 発表標題 開発途上国におけるカンニング行為－教員はどのようにかかわっているのか
3. 学会等名 早稲田大学教師教育研究所 2021年度第1回構成員研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 前田美子
2. 発表標題 一党独裁体制下の教育におけるアカウンタピリティ- 猫の首に鈴をつけることができるのは誰か？
3. 学会等名 日本比較教育学会第57回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mitsuko Maeda
2. 発表標題 Low-paid teachers' involvement in exam cheating in developing countries
3. 学会等名 International Center for Academic Integrity 2022 Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 前田美子
2. 発表標題 教育不正に対する教師の態度 教師教育援助への示唆
3. 学会等名 日本教師教育学会第30回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 前田美子
2. 発表標題 開発途上国における中高生のカンニング行為 - なぜ理科の試験でカンニングをするのか -
3. 学会等名 日本理科教育学会第70回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 前田美子
2. 発表標題 開発途上国における学業不正 - 実態と要因に着目して -
3. 学会等名 第71回大阪女学院大学平和・人権研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 前田美子
2. 発表標題 カンボジアにおけるカンニング行為 - 小学校から高校に至るまでの経験に着目して -
3. 学会等名 日本比較教育学会第55回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mitsuko Maeda
2. 発表標題 Factor influencing exam cheating: a case study on Cambodian students
3. 学会等名 World Education Research Association Focal Meeting 10th Anniversary (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mitsuko Maeda
2. 発表標題 開発途上国におけるカンニング行為 - 教師と児童・生徒の関係性に着目して -
3. 学会等名 日本教師教育学会第29回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 前田美子
2. 発表標題 カンボジアの教育現場における学業不正
3. 学会等名 日本比較教育学会第54回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田美子
2. 発表標題 カンボジアにおけるカンニング行為 - 不正のトライアングル理論による考察 -
3. 学会等名 第2回東南アジア教育研究フォーラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田美子
2. 発表標題 教育汚職の歴史的変遷 - カンボジアを事例として -
3. 学会等名 日本比較教育学会第53回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Mitsuko Maeda
2. 発表標題 Teacher's involvement in dishonest academic practices - with special reference to Cambodian teachers
3. 学会等名 The 61th World Assembly of International Council on Education for Teaching (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 前田美子
2. 発表標題 カンボジアにおける教育汚職－歴史的変遷に着目して－
3. 学会等名 第64回大阪女学院大学平和・人権研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mitsuko Maeda
2. 発表標題 A review of literature on corruption in education
3. 学会等名 Cambodia-Japan Educational Research Seminar (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mitsuko Maeda
2. 発表標題 The Science of Exam-Cheating: Origin, Development, and Future Direction
3. 学会等名 International Center for Academic Integrity 2023 Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Mitsuko Maeda
2. 発表標題 The Science of Exam-Cheating: Origin, Development, and Future Direction
3. 学会等名 Comparative and International Education Society 2023 Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関